

書評

編：内富庸介，藤森麻衣子

がん医療におけるコミュニケーション・スキル 悪い知らせをどう伝えるか [DVD 付]

書評者：木澤義之(筑波大学大学院教授・人間総合科学研究科)

さわやかな秋の風に運ばれて、この本は私の前にやってきた。正直、書評はあまり気乗りする仕事ではなかったが、読み始めるうちにぐいぐい引き込まれた。本書はタイトルに『がん医療におけるコミュニケーションスキル』とあるが、その内容はがん医療の枠にとどまらずコミュニケーションの基本にも触れられており、わが国独自の、根拠に基づいたコミュニケーションの実践書であるということができよう。

付属している DVD を参照しながら本書を読破すると、編者でいらっしゃる国立がんセンター東病院臨床開発センターの内富庸介先生、藤森麻衣子先生が臨床研究を

もとに開発された SHARE プロトコルを用いたがん医療におけるコミュニケーションの基本と実感を臨場感を伴って学習することが可能である。巻頭には悪い知らせを伝える際のコミュニケーションに関する今までの知見や、欧米のコミュニケーションスキルトレーニングのプロトコルと SHARE の比較がまとめられ、evidence-based な構成となっている。筆者が担当している日本緩和医療学会の教育プログラム EPEC-0 では現在、悪い知らせを伝える際のコミュニケーション・スキルとして SPIKES を紹介しているが、来年度からカリキュラムの改訂にあたり、今後この

SHARE プロトコルに基づいたものに変更することを検討している。また、第一線で働くがん治療医、精神腫瘍医、緩和ケア医が、難しいケースへの対応や終末期がんへの対応について執筆されており、さまざまな臨床場面の応用が可能で、まさにかゆいところに手が届く配慮がなされている。

全国のがんに携わる医療関係者のみならず、医学生、看護学生などの医療系学生にもぜひ読んでもらいたい好書である。

● A5 頁 152 2007 年
定価 2,940 円
(本体 2,800 円＋税 5%)
[ISBN 978-4-260-00522-7]
医学書院刊